

合邦 から 啓蒙 へ

— 洗練と産業の都市 —

村松茂美

はじめに

1707年5月1日、スコットランドの教会制度と私法の存続を条件にイングランドとスコットランドの包括的な合邦が実現された。ひとつの議会、ひとつの中央政府、ひとつの公法のもとで、イングランド、スコットランド、ウェールズを包括するグレート・ブリテン王国が出現した。しかしそれに先立って、スコットランドでは合邦の是非をめぐって、そしてイングランドとスコットランドの関係をめぐって激しい論争が繰り広げられた。代表的な反合邦論者アンドルー・フレッチャー (Andrew Fletcher of Saltoun 1653?–1716) は、両国の包括的合邦がスコットランドからの人口の流出とロンドンへの富と人口の集中をもたらすと批判し、複数の主権都市から構成される連邦国家を提案した。他方、合邦派は両国の包括的合邦によって実現するイングランドとその植民地との自由貿易がスコットランドにもたらす経済的利益を主張した。また合邦派のシートン (William Seton of Pitmedden 1673–1744) は合邦がスコットランドの庶民を貴族の抑圧から解放すると主張した。合邦はスコットランドにどのような作用を及ぼしたか。そしてその作用は1750年代から花開く啓蒙とどのような関係をもつことになるのか。この点を合邦後の「貴族とジェントリ」の活動の軌跡のなかに跡付けること、これが本稿の課題である。それは合邦期にフレッチャーによって提起された諸論点がどのように批判・継承されていくか、この問題と関連するはずである。

1. 合邦後の貴族とジェントリ

合邦はスコットランドに何ををもたらしたか。どのような作用をおよぼしたか。それは多様な観点から検討することが可能である。経済的效果にかぎって言えば、合邦後期待されたイングランドとその植民地との自由貿易の効果はただちにはあらわれなかった。そればかりではなく、合邦条約の諸条項が無効にされていくかのようにみえた。1712年3月の国王に忠誠を誓う監

督派牧師にイングランド教会の儀礼を使用することを認める寛容法と、4月に議会を通過したパトロニッジ法にスコットランド教会は不満と不安をつのらせた。さらにモルト税は、戦争が継続されているかぎり、スコットランドに適用されることはない合邦条約で定められていたにもかかわらず、1713年にそれが反古にされた。スコットランドは、その独立の喪失という代償をはらいながら、フレッチャーが予測したように、少数の議員しかおくることができないブリテン議会において、その利益はイングランドの利益に圧倒されているかのようにみえた。こうした合邦体制への不満から、1713年に貴族院でスコットランドの貴族シーフィールド (James Ogilvy, 1st Earl of Seafield, 4th Earl of Findlater 1682-1761) から合邦条約廃棄の動議がだされるにいたった。シーフィールドは1702年から合邦交渉委員を務め、スコットランド議会においては積極的な合邦賛成派であったにもかかわらず。さらにその不満は、1715年のジャコバイトの反乱、1725年の新モルト税をきっかけにグラスゴーを中心としたショーフィールド暴動、そして1736年には、密輸業者の処刑にあつまった群衆に発砲を命じたエディンバラ警護隊長ポータシアスの死刑執行の延期に端を発したポータシアス暴動として爆発した。

他方では、合邦はイングランドの文化、習俗そして経済に接触する機会を増大した。イングランドの洗練された習俗そしてその経済は、スコットランドの後進性を強く意識させた。イングランドの習俗・文化を学び取ろうとする動きがあらわれる。1712年、アラン・ラムジイ (Allan Ramsay 1686-1758) によって創設された「イージー・クラブ」 (Easy Club) である。ラムジイは、このクラブでアディソン (Joseph Addison 1672-1719) とスティール (Richard Steele 1672-1729) の『スペクテイター』誌を読んだ。『スペクテイター』誌は、1711年3月に創刊され、1714年12月20日発行の635号をもって廃刊となった。各号はひとつの論説からなり、これらの論説がロンドンで出版されるとただちにエディンバラで再版された。フィリップスンの解説にしたがえば、アディソンとスティールは、諸論説を通して、「意見の移ろいやすさ」と「党派心の激しさ」に対する解毒剤として「上品さと洗練」の美德を説いた。その諸論説が示したのは、商業社会における人間は、社交を通してはじめて有徳な生活をおくることができるというものであった¹⁾。

1) Nicholas Phillipson, *Hume* (London, 1989), p.27, 'Adam Smith as civic moralist in Istvan Hont and Michael Ignatieff (eds.) *Wealth and Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment* (Cambridge, 1983), p.189, p.199 (水田洋・杉山忠平監訳『富と徳 スコットランド啓蒙における経済学の形成』(未来社, 1990年), 310頁, 325頁。また, , 'The Scottish Enlightenment' in Roy Porter and Mikulas Teich (eds.) *The Enlightenment in National Context* (Cambridge, 1981) 参照。アディソンの思想については, Edward A. Bloom and Lillian D. Bloom, *Joseph Addison's Sociable Animal* (Brown Univ. Pr. 1971) 参照。

他方でラムジイはスコットランドのヴァナキュラーな詩の編集発行と創作にあたった。彼の行動には当時のスコットランド人の「精神の二面性」があらわれている。イングランドの文化・習俗への憧憬とスコットランド国民としてのアイデンティティの危機である²⁾。この危機は、スコットランド国民として、「誇るべきもの」の喪失・欠落感に起因する。その危機の克服は、「誇るべきもの」を提示する以外にない。ラムジイはそれをヴァナキュラーな文学にもとめた。他方、ジャコバイトのラディマン (Thomas Ruddiman 1674–1757) はラテン学の伝統に求めた。彼の仕事は、ラテン学がスコットランド国民の遺産であり、ルネッサンスの伝統を介して古代ローマの巨匠にスコットランド人を結びつける学問であることをしめすことを意図したものであった³⁾。さらにジャコバイトのアーバークロンビィ (Patrick Abercromby 1656–1718?) の著作はスコットランド人の伝統的な尚武の精神をたたえるものであった⁴⁾。このような試みはジャコバイトにかぎられたものではなかった。クィーンズベリ (James Douglas, 2nd duke of Queensberry 1662–1711) の配下として合邦交渉にのぞんだジョン・クラーク (John Clerk 1684–1755) は、合邦がブリテン国家を古代ローマをしのぐ威勢にのぼることを可能とすると説いた一方で、古代カレドニア人の勇猛さを論じた。彼の古事学・考古学によれば、「ハドリクススの壁」は古代ローマ人の征服事業の記念碑ではなく、古代カレドニア人の独立と抵抗の記念碑であった⁵⁾。

しかし合邦後のスコットランドは、たんに過去をふりかえるだけではなかった。スコットランドの改革を志向するクラブ・協会が設立されていく。「ランケニアン・クラブ」 (Rankenian Club 1717–1774)、「農業知識改良者協会」 ([Honourable] Society of Improvers in the Knowledge of Agriculture 1723–1745?)、「エディンバラ哲学協会」 (Philosophical Society of Edinburgh 1737–1783)そして「選良協会」 (Select Society of Edinburgh 1754–1764) など、

2) この点については、David Daches, *The Paradox of Scottish Culture: The Eighteenth Century Experience* (London, 1964), pp. 23–24, Alexander M. Kinghorn and Alexander Law, 'Allan Ramsay and Literary Life in the First Half of the Eighteenth Century', in Andrew Hook (ed.) *The History of Scottish Literature* Vol. 2 1660–1800 (Aberdeen, 1987)。

3) Douglas Duncan, *Thomas Ruddiman: A Study in Scottish Scholarship of the Early Eighteenth Century* (Edinburgh and London, 1965), p. 152. ラディマンについては、George Chalmers, *The Life of Thomas Ruddiman* (London, 1794) も参照。ヴァナキュラーな文学にたいするラディマンの態度についての解釈はダンカンとチャーマーズでは相違する。

4) Patrick Abercromby, *The Martial Achievements of the Scots Nation being an account of the Lives, Characters, and memorable Actions, of such Scotsmen as have Signaliz'd themselves by the Sword at Home and Abroad* (Edinburgh, 1711–15)

5) Iain Gordon Brown, 'Modern Rome and Ancient Caledonia: the Union and the Politics of Scottish Culture' in Andrew Hook (ed.), *ibid.* 参照。

その存続期間の長短を問わなければ、多数のクラブ・協会がうまれていく⁶⁾。これらのクラブ・協会の意味に関しては解釈がわかる。一方には、合邦によって廃止された議会にかわる「シヴィックな美德」の実践の場として解釈する立場があり、他方には、そのクラブ・協会を17世紀後半からスコットランドにおこる改革の延長線にあるものとする解釈である。前者はフィリップスの解釈であって、それによれば、スコットランド議会の廃止とともに、フレッチャーが予言したように、上層の「統治エリート」はロンドンに生活の拠点を移した。ロンドンに移ることのできなかった「統治エリート」は、彼らの「シヴィックな美德」を発揮するために議会にかわる場＝「協会・クラブ」を必要とした。こうしてフィリップスは、この統治エリート、知識階級そして協会・クラブの相互関係のなかで「シヴィックな美德」がどのような変質をこうむるのか、そのプロセスのなかにスコットランド啓蒙の形成をあとづけようとした⁷⁾。後者はエマーソンの解釈である。エマーソンは、このような合邦後の動きが17世紀後半からおこる改革運動の延長上にあるものであること、そして数学、医学、植物学など「自然哲学」の啓蒙思想にもつ重要性を強調したのである⁸⁾。両者の解釈を対比した場合、エマーソンにおいては、必然的に合邦の意義が低く評価されることになる。はたして合邦は、啓蒙の形成過程において重要な意味をもつことはなかったのであろうか。

エマーソンは、近著においてスコットランドの大学改革においてアイレイ伯 (Archibald Campbell 1682-1761, 1743年から第3代アーガイル公) とその党派がはたした積極的な役割をあらためて強調した⁹⁾。なぜ、アーガイルはそのような改革志向をもつことになるのか。それは彼の個人的資質にきせられるべき問題であるのか。合邦は貴族たちの性格を変化させずにはおこなったのである。政治的活動の舞台をロンドンにもとめ、そこに居をうつすことができた大貴族たちは、ロンドンでイングランドの政治家たちとはりあうためには巨額の貨幣を必要

6) 川原和子「スコットランド啓蒙期の主要学・協会、クラブについて 付・関連刊本及びMSS.リスト」川原さんを追悼する会編『女性司書の足あと 回想の川原和子』(荒川印刷, 2008年)。

7) その研究については以下の文献参照。Nicholas T. Phillipson, 'Culture and Society in the eighteenth-century province: the case of Edinburgh and the Scottish Enlightenment', in Lawrence Stone (ed.) *The University in Society*, 2 vols. (Princeton, 1974), II, pp. 407-48, 'The Scottish Enlightenment', in R. Porter and M. Teich (eds.), *The Enlightenment in National Context* (Cambridge, 1981), pp. 19-40. このような国民的文脈において、スコットランド啓蒙を研究する立場に対してロバートソンの批判がある。その批判の要点は、そのような立場からの研究は、多様な学問・文化運動を啓蒙思想のうちに含めることになり、研究の拡散をまねき、啓蒙の「普遍的本質」をみのがしかねない、というものである。

8) Roger L. Emerson, 'Natural Philosophy and the problem of the Scottish Enlightenment', *Studies on Voltaire and the eighteenth Century*, 242 (1986).

9) Roger L. Emerson, *Academic Patronage in the Scottish Enlightenment: Glasgow, Edinburgh and St Andrews Universities* (Edinburgh University Press, 2008)

とした。第2代アーガイルはロンドンでの生活に年間5,000ポンドを必要としたといわれる。彼はこの費用をまかなうために、旧来の氏族関係を顧慮することなく、借地人を競争入札によって決定し可能なかぎり多くの地代をえようとした。氏族民の不満がつのると弟アイレイは、このようなやり方をあらため氏族民を優先的に借地人とする旧来の方式にもどすことになったが、アイレイ自身巨額の貨幣を必要としたことにはかわりはない。アイレイ(第3代アーガイル)のスコットランド改革はこのような必要性によってうながされていたのである¹⁰⁾。たしかにアイレイはイートン、グラスゴーそしてユトレヒトで学んだ開明的貴族であるかもしれない。しかし合邦後のスコットランドの改革を彼の個人的資質にのみ帰すことは、彼をふくめてロンドンに拠点を移した大貴族たちががおかれた諸事情を無視することになる。この問題に関するキャンベルの議論は、フィリップスンとエマースンの議論にそれぞれ限定をふすという点で興味深い。キャンベルによれば、ロンドンに拠点をうつしたスコットランドの最高位の貴族たちはその影響力を保持し続け、彼らがスコットランドのかかえる懸案について最終的な決定権をもった。ロンドンに拠点を移すことのできなかった貴族たちが改革・改良という新たな役割を実行できたとしても、それは、最高位の貴族たちが許容するかぎりにおいてであった。そしてその最高位の貴族たちの財力は、合邦以前のエディンバラでの政治生活にとっては十分なものであったにもかかわらず、ロンドンでの生活の必要をみたすうえではきわめて不十分なものであり、そのため改良政策の採用と奨励へとうながされたのである¹¹⁾。

他方、爵位をもたないレアドがたんに土地の経営に満足することなく、スコットランドで社会的名声をえようとするれば、法曹の世界に入ることが通常であった。そしてその世界は彼らに開かれていた¹²⁾。彼らの多くは法律の知識を修得するために、オランダで学んだ。イングランド法の知識はスコットランドでは役立たず、スコットランドの大学も法学についての講座がまだ整備されていなかったためである。オランダへの留学生が多額の貨幣をスコットランドから持ち出しているという不満はやがて大学改革に拍車をかける一因となる。しかしオランダで法学を学んだ青年たちは、法曹界にうけいられるとしても、それだけで社会的名声を手

10) Eric Cregeen, 'The Changing Role of the House of Argyll in the Scottish Highlands,' in N. T. Phillipson and Rosalind Mitchison (eds.) *Scotland in the Age of Improvement* (Edinburgh, 1970).

11) R. H. Campbell, 'The Enlightenment and the Economy', in R. H. Campbell and Andrew S. Skinner (eds.), *The Origins and Nature of the Scottish Enlightenment* (Edinburgh, 1982) p. 14.

12) 「1661年から1712年まで、そしてずっと後まで、上級弁護士のほとんどすべてが土地所有者の子息であり、きわめて多くの場合、その長子であったことは明白である。実際、この時期、土地所有者かあるいは教会の牧師の子息でないものが上級弁護士としてうけいられることはほとんどなかった。」John Macpherson Pinkerton (ed.) *The Minute Book of the Faculty of Advocates*, Vol. I. 1661-1712 (Edinburgh, 1976), ii.

にいれることができたわけではない。スコットランドで政治的影響力をもった貴族の後押しがあつてはじめて法曹界において高い地位をえることができた。フレッチャーの同名の甥 (1692-1766) がライデンで法学を学び、1717年に上級弁護士になることができたとしても、彼に高い地位が約束されたのは、23年の婚姻をとおしてアーガイル家と縁戚関係を結んだ後のことであつた¹³⁾。彼は1724年民事裁判所裁判官としてミルトン卿となり、26年刑事裁判所裁判官、35年最高刑事裁判所書記卿となる¹⁴⁾。

合邦後のスコットランドにおいては、政治的には三つのグループが存在していた。ジャコバイト、スクワドロンそしてアーガイル派である。スチュアート王家の復位に期待をよせるジャコバイトを別とすれば、イングランドのコートは、スコットランドからブリテン議会に送られる議員がコートの側につくことを期待した。他方、スコットランドの貴族から選出される16名の貴族院議員も、イングランドの閣僚やその実力者と良好な関係を築き高位の官職をあらそつた。イングランドの閣僚は、スコットランドでの影響力と貴族相互間の関係を顧慮して抜擢する貴族を選択した。ゴドルフィン (Sidney Godolphin, earl of Godolphin 1645-1712) はクィーンズベリを、1711年5月大蔵卿となったオックスフォード伯 (Robert Harley 1661-1724) はマー伯 (John Erskine 1675-1732) を、21年に大蔵卿となったウォルポール (Robert Walpole 1676-1745) は第2代アーガイルを選択した。ポータス暴動を理由にエディンバラに厳罰を課そうとするウォルポールと寛大な処置を願うアーガイルは決裂し、スクワドロンがアーガイルにとってかわる。1745-6年のジャコバイトの反乱によってハイランド問題の重要性を認識したブリテン政府は、ハイランド地方に影響力をもつアイレイを重用することになる。抜擢されたスコットランド貴族はロンドンに拠点をおき、スコットランドにはその「政治的代理人」をおいた。クィーンズベリはジョン・クラークを、初代モンローズ (James Graham 1682-1742) はグラハム (Mungo Graham of Gorthy 1670-1754) を、第2代アーガイルはダンカン・フォーブズ (Duncan Forbes 1685-1747) を、第3代アーガイル (アイレイ) はアンドル・フレッチャーを、第4代ツィードデイル (John Hay 1695-1762) はトマス・ヘイ (Thomas Hay of Huntington 1703-1755) をその代理人とした。その代理人も「通信者」をもっていた。

13) 彼の妻の叔母はアイレイの叔父と結婚していた。John Stuart Shaw, *The Management of Scottish Society 1707-1764: Power, Nobles, lawyers, Edinburgh Agents and English Influence* (Edinburgh, 1983), p. 63.

14) 民事裁判所は、裁判長をのぞいて、任期終身の14名の裁判官からなる。この14名の裁判官から6名が刑事裁判所裁判官に任命される。その6名の裁判官のうち1名が最高刑事裁判所書記卿に国王によって任命される。W. C. Lehmann, *Henry Home, Lord Kames, and the Scottish Enlightenment*, (The Hague, 1971), p. 19.

たとえばフレッチャーとアイレイの場合には、この「通信者」がエディンバラにいるフレッチャーに「情報と要望」を送り、それを整理してフレッチャーがロンドンにいるアイレイに「提案」を送る。アイレイはそれに対して彼の判断と国王の保証を送り返す。このような体制がつくられたのである¹⁵⁾。

2. 農業知識改良者協会

このような貴族とレアドを中心に 1723 年 6 月 8 日に設立されたのが「農業知識改良者協会」であった。設立時この協会のメンバーは土地所有者を中心に 300 人に達し、そのうち 40 人は貴族であった。主要な貴族はアソール公 (John Murray, 1659-1724)、ハミルトン侯 (James Hamilton 1703-1743)、ステア伯 (John Darlymple 1673-1747)、ホープトン伯 (Charles Hope 1681-1742)、アイレイ伯、ツイードデイル侯である。貴族以外には、サー・ジョン・クラーク、ダンカン・フォーズ、アンドルー・フレッチャー、そしてジャコバイト、ロックハート (George Lockhart 1673-1731) が創立期のメンバーであった。このような顔ぶれから、この協会が政治的党派をこえた団体であったと判断できる。初代会長にはトマス・ホープ (Thomas Hope 1681-1771) が選ばれた。彼は 1706 年から翌年にかけての議会において合邦に反対票を投じた。協会は設立の日に次のような決議をおこなっている。

前述の貴族とジエントリは・・部分的には技術の不足によって、部分的には、この国の異なる土壌が可能な改良のための適切な実験をおこなうことについて正当な奨励を欠いていたために、スコットランドにおける製造業がいかに低調な状態におかれているか、そして土地の正しい耕作と改良がどれほど無視されているかを考慮して、・・適切な方策を検討すること、そしてこれほど賞賛に値する企画を将来にわたって運営するために適切な規則を定めるために・・次の 6 月の第一金曜日に最初の会合をもつことを決議した。¹⁶⁾

6 月 13 日の会合では総会が年 4 回、委員会を選出する年次大会が毎年 2 月に開催されることが決定された。さらに会員と新規会員の名簿を作成する書記をおくこと、次の会合までに協

15) Roger L. Emerson, *Professors, Patronage and Politics: The Aberdeen Universities in the Eighteenth Century* (Aberdeen, 1992), p. 4, p. 6.

16) *Selected Transactions of the Honourable The Society of Improvers In the Knowledge of Agriculture in Scotland 1743* (Glasgow, 2003).

会の一般的規則案を作成する委員会が任命された。翌週の20日、その委員会は「協会のよりよい運営のために」以下の決議案を提出した。それは協会の組織と活動方針を決定するものであった。協会の全会員から25人が選出され委員会 (committee) を構成する。このうちエディンバラかその近隣で生活する13人が評議会 (council) を構成する。協会には秘書 (secretary) がおかれ、秘書は会員名簿の作成、入会金 (1クラウン) と年会費 (1クラウン) の徴収にあたり、年次大会で会員異動と会計について報告する。入会希望者は秘書をとおして申し込み、委員会の面接によって加入を認められる。この委員会は部会に分けられる。部会はそれぞれ農業に関する異なる主題をとりあげ、それについての考えを書面でのこし、委員会全体がそれを閲覧する。また委員会は、土地を管理する方法に関して「不適切なものを是正し有益なものを模倣するために」、多様な方法に最も精通しているあらゆる地方の人々からえられた知識はすべて記録され総会に提出される。

この協会は「貴族とジエントリ」によって構成されるが、「農業者や園芸師」(Farmers and Gardeners) も、協会あるいは評議会が資格を有すると判断した場合には、入会金免除で入会が認められる。「労働者」(workmen) が、耕作上の実験においてすぐれた技術を示した場合には、その労働者の名前が登録され、「種々の目的」のために、その労働者があてがわれる。自分たちの農場あるいは土地に関する評議会の意見を知りたいと思うあらゆる協会員は、その農場・土地の正確な位置状況と土壌の性質とともに「質問」を秘書におくれば、評議会によって回答される。こうしてこの協会の目的は、各地から農業上の知識を集め、会員たちの直面する問題に答えようとするものであった。1743年に刊行された会報は会員たちの「質問」とそれにたいする「回答」から構成されているのである。

しかしこの協会は、たんに農業に関する知識の改善のみを目的とした協会ではない。先の会報にふされた「献辞」には、漁業と製造業発展の基礎として農業を位置づけたうえで後者の知識の改善をはかることを目的としていた。1727年の「漁業・製造業信託評議会」[Board of Trustees for Fisheries and Manufactures] の設立はこの協会の運動によるものであった¹⁷⁾。「献辞」によれば、農業、漁業そして製造業は「相互に助け合っている。漁業と製造業の成功は食料と材料の安価さに依存し、後者はまた農業において実現される進歩に依存している」からである。そしてその改良は市場経済を前提としている。農業者の奨励は「迅速な消費」と彼の農場の生産物が市場でもつ価値に依存している。そしてそれは国内にとどまるように奨励された国民と、スコットランドに到来しとどまるように奨励された外国人の数に比例して上昇す

17) Rendall, *The Origins of the Scottish Enlightenment 1707–1776* (Macmillan, 1978), p. 11.

るにちがいない。この協会の立場からすれば、スコットランドの人口の増大があらゆる産業の発展の大前提である。この協会はスコットランドの農業の後進性だけでなく、合邦後に生じたスコットランドからの人口流出の問題を重視していたのである。

こうしてこの献辞はスコットランドの改良に貢献した「貴族とジェントリ」の功績をたたえる。アソール公は、多くの賞賛に値する模範をしめすことによって他の人々の農業の知識を改善し、亜麻を漂白するさいに、彼の裁判権内でおこなわれる詐欺と不正を抑制するための条例と規制を作成し、他の人々が模倣できるように彼の処置の仕方を協会に伝えた。ハミルトン公は外国産のシャツ地用亜麻布、寝具や家具の購入を禁止し国産亜麻布を使用すべきことを建議し同意された。その結果、最も地位ある人々の公の集まりにおいてさえ、国産の亜麻布が着用された。さらにスコットランド産穀物の蒸留が奨励されるために、外国産蒸留酒の飲酒に反対する決議を獲得した。ステア伯は、彼の農場産の亜麻から作られ彼の工場で仕上げられる上質亜麻布製造業を設立した。また彼ほど品質のすぐれた黒牛を育てる農場をもつものはない。亜麻布と畜牛こそスコットランドに貨幣をもたらすものである。ホープトン伯は、土地を改良し多くの人々にパンをあたえた。1740年の不作の年には彼の借地人たちが改良を断念しないように地代を軽減した。アイレイ伯は、あらゆる所で放置されてきた沼地に多大な費用をかけきわめて価値あるものにした。そこでは穀物、牧草、オーク等がすでに繁茂している。彼は有用な植物をこの国に導入した。しかしとりわけ、漁業と製造業の発展は公的基金を活用することに払った彼の努力に多くを負っている。賞賛されるべきは貴族のみではない。「ホープ氏」は公的な奨励をまたずに彼の貨幣と時間を農業と製造業の発展に費やした。彼はイングランド、フランス、フランダース、オランダで農業を学び、20年以上にわたって農業の知識を広めた。「コバーン氏」は1736年にオーミストン協会を設立し農業知識の普及に努めた。

この農業知識改良者協会の立場からすれば、スコットランドにおける農業の発展は「貴族とジェントリ」の献身的努力によるものであった。農業は単にひとつの科学 (a Science) であるだけでなく、「あらゆる技芸と科学の生命と支え」である。土地労働者 (Land-labourers) のほとんどは、「貴族とジェントリ」の指導がなければ、「慣習によって支配され、父祖の説明しがたい方法に盲目的に従う」人々である。農業は他の諸科学と同じように、大学の教育方法にしたがって教えられるべきである。「農業の教授」あるいは「改良の視察人」は、大学の教授たちより社会にとってどれほど有益なものであることか。改良の視察人が各州の農業事情を年々報告し、必要とする人に助言をあたえ、改良者協会を設立する権限をあたえられ、すべての州に協会が設立されるならば、「農業の精神」(Spirit of Husbandry) がどれほど高揚され広まることか。そしてオーミストンのように改良されるならば、すべての州は現在よりも10倍以

上の地代を短期間のうちにもたらすであろう¹⁸⁾。

この「献辞」がモデルとする農業改良はソールトンに近いオーミストンでレアード、コバーン (John Cockburn of Ormiston 1679-1758) によっておこなわれた改良である。コバーンは、1703年のスコットランド議会にフレッチャーと同じくハデングトンシャーから選出され、合邦には賛成票を投じた。1741年までブリテン議会の議員であり、イングランドでの滞在はそのすすんだ農業事情を見聞することを可能にした。この体験が彼の父アダム・コバーン (c.1656-1735) がはじめた改良をうけつぎ、それをさらにすすめる要因となった。20世紀になって出版された彼の書簡集¹⁹⁾から浮かび上がってくるのは、彼の「園芸師」に農業改良をおしすすめることを命じ、その方法をこと細かく指図する彼の姿である。また彼の借地人に対する態度も決して「専制君主」のそれではなかった。彼は信頼をおく農業改良のある助言者への書簡のなかで次のように語った。

私はあらゆる種類の専制を嫌悪する。私の借地人たちが欠乏することによって私の奴隷となるほど何百という貧しい家族から搾り取って私のものを少しばかり殖やすよりも、私の借地人たちが自分のものと呼ぶものを私のもので得るのを見ることに大きな喜びをつねに感じることでしょ。²⁰⁾

こうして彼は、借地人に長期の借地権をあたえ、囲い込みを促進し、新たな作物を導入したのである。その「献辞」の描く世界は、シートンが展望した合邦後の世界 そこでは農夫や借地人が農業経営の主体であった とは異質の世界であり、むしろフレッチャーがその農業改革論のなかで描いた適度な規模の地主経営の世界である²¹⁾。そして「献辞」の農業思想はケイムズ (Henry Home, Lord Kames 1696-1782) の「ジェントルマン・ファーマー」の思想につながるものである。ケイムズにおいてもコバーンの改良はひとつの模範であった。たしかにコバーンの農業改良は経営的には失敗し、多額の負債のために1748年にはその所領を手放すこ

18) *Selected Transactions of the Hourble The Society.*, Dedication.

19) James Colville (ed.) *Letters of John Cockburn of Ormiston to his Gardener 1727-1744* (Edinburgh, 1904).

20) James Colville, 'Introduction to *Letters of John Cockburn.*,' p. xxiv. この書簡は『書簡集』におさめられてはいない。

21) フッチャーの農業論については、村松茂美「A・フレッチャーにおける「奢侈」と「貧困」 外国貿易、家内奴隷制、農業改革」『熊本学園大学経済論集』第12巻、第1・2合併号(2005年、9月)参照。

とを余儀なくされた。しかしそれにもかかわらず、ケイムズにとって彼は私利をかえりみず、スコットランドの農業の発展のために尽くした模範とすべき「愛国者」であった。ケイムズによれば、農業は「諸技術のなかで主要なもの」であり、「深遠な哲学と有用な実践との結合」であり、「ジェントルマンにとって最もふさわしい職業」である。「数年前まで」スコットランドの農業者は無知で怠惰であった。ジェントルマンこそ農業者でなければならなかった²²⁾。

このように位置づけられた「貴族とジェントリ」のいっそうの献身的努力をスコットランドの産業の発展のためにどのように引き出すことができるのか。そして、スコットランドの人口をどのように増大することができるのか。それはかつての首都エディンバラの改善にかかっている。

3. 都市の改善と国民の繁栄

1752年、『エディンバラ市公共事業推進への提言』²³⁾ (以下『提言』と略す)と題されたパンフレットがエディンバラで出版された。このパンフレットは、1745-6年のジャコバイトの反乱とその鎮圧後、急速に発展をはじめたスコットランド経済に対比して、かつての首都エディンバラのあまりに「みすばらしい」現状を改善するために、1752年7月8日の王国自治都市会議のエディンバラ改善決議にしたがって委員会が設置されたことを伝えている。その「みすばらしさ」とは、エディンバラの住民の居住空間、商業施設、そして司法・行政に関連する公共施設のそれである。人々が居住する家屋は、ヨーロッパのどんな都市よりも密集し、「信じられないほどの高さ」にまでおよび、その同じ建物のなかに10から12の家族がひしめきあっている。商人たちの取引所もなければ、記録や証書のための安全な保管所もなく、市参事会の常設の会議場さえもない。このような現状を打破するために、先の委員会は以下の四点を提案した。

1. ハイストリートの北側の廃墟のうえに、商人たちのために適切な施設をもった取引所を建設すること。
2. パーラメントクロスの廃墟のうえに、裁判所、自治都市そして市参事会に今なお欠いてい

22) Henry Home, *The Gentleman Farmer. Being An Attempt to improve Agriculture, by subjecting it to the Test of Rational Principles* (Edinburgh, 1776), Preface.

23) *Proposals for carrying on certain Public Works in the City of Edinburgh* (Edinburgh, 1752). 本書では1982年のリプリント版を使用。以下 *Proposals* と略す。

るような施設，書記事務所，登記官と弁護士図書館のための部屋をもつ大きな建物を建設すること。

3. 街を拡張するための議会の条例をえること。南北を結ぶ新たな通りをひらき，市場と屠殺場を撤去し，ノース湖を両岸に遊歩道とテラスをもった運河に変えることによって，街を拡張し美化すること。
4. これらの公共事業の費用は，国民的規模での寄付によってまかなわれるべきこと。

『提言』は，この計画の目的を説明し，ひろく国民的支援をえるために，当時エディンバラ市長の職にあったドラモンド (George Drummond ?1687-1766)²⁴⁾ の影響のもとで，エリオット (Gilbert Elliot, Lord Minto 1693-1766) によって書かれたものであった²⁵⁾。エリオットはユトレヒト大学で法律を学んだのち，1715年に上級弁護士となり，26年に民事裁判所裁判官としてミント卿となる。彼もまた「農業知識改良者協会」の創立時の会員であった。『提言』は次のように言う。

ある国民の繁栄が帰せられうるいくつかの原因のなかで，その首都の位置，便宜そして美しさが少なからず重要なものであるのは確かである。これらの諸事情が幸運にもたまたま同時に作用している首都は，おのずと貿易と商業，学問と技芸，洗練 [politeness] そしてあらゆる種類の改善 [refinement] の中心となるはずである。²⁶⁾

ここでは，国民の繁栄の主要な原因のひとつが都市の状態にあること，そして発展する都市は単に「貿易と商業」の中心であるだけでなく，文化や洗練された習俗 [polished manners] の中心でもあるべきことが語られている。この実例はロンドンが示している。ロンドンは河川や海から適度な距離にあるために，あらゆる生活必需品や奢侈品がきわめて容易に供給される。さらに充実した宿泊施設，美しく便利な通りや広場，そして貿易と航海，取引所，議会の両院，裁判所の仕事が多数の人々を集め，そのためインダストリと改良の精神がそこにはあふれている。それに対してエディンバラは，その位置とフォースとの近接というきわめて有利な条件を

24) ドラモンドについては，次の文献参照。William Baird, *George Drummond: An Edinburgh Lord Provost of the Eighteenth Century* (Edinburgh, 1912), M. Hook, R. Mcneil, S. Lee, J. Cromarty, F. McIntyre, J. Lordon and J. Reid-Baxter, *Lord Provost George Drummond 1687 - 1766* (Edinburgh, 1987)

25) A. J. Youngson, *The Making of a Classical Edinburgh* (Edinburgh, 1966), p. 3.

26) *Proposals.*, p. 5.

もつにもかかわらず、広い通りの欠如、密集した家屋、不潔さ、そして快適な宿泊施設や取引所その他の公共の建物を欠くために、そのような有利さが全く相殺され、きわめてみすぼらしい状態にある。このような障害が存在する理由は、「身分ある人々」がエディンバラにほとんど居住していないということ、そして「洗練された習俗と増大する富とに対立する非常に多くの偏狭な偏見や狭隘な考えが依然として執拗に保持されている」²⁷⁾ ためである。その結果エディンバラではインダストリと改良が立ちおくれた。エディンバラの都市と経済の発展は、「身分ある人々」の不在と、彼らによってになされる「洗練された習俗」の欠如によって阻害されていた。

このようにロンドンに対比してエディンバラの立ち遅れを指摘するものは、けっしてこの『提言』のみではない。フレッチャーが1698年の『スコットランド諸事情二論』においてすでにおこなっていた。この『提言』も、そのフレッチャーに言及し、彼の次の一文を引用している。

ロンドンの幸運な位置がイングランドの光輝と富の主要な原因であったように、エディンバラの不利な位置が、スコットランドの大部分の人々がそのなかで生活する貧困と不潔さのひとつの大きな原因であった。²⁸⁾

しかし、フレッチャーがエディンバラの不利な位置を強調した点で、『提言』の立場と異なる。さらに『提言』は、エディンバラをロンドンに匹敵するほどの都市へと改善しようとしたのに対して、フレッチャーはエディンバラの大都市への発展を考えていたわけではなかった。むしろ彼は、先の引用文に先行する文章「・・・政府の現在の所在地を移転することはその[議会の一引用者]考慮にあたいしうることである」²⁹⁾ から明らかなように、首都の移転を考えていたのであり、さらに彼のブリテン連邦構想ではエディンバラは主権都市のひとつでさえもなかった。フレッチャーにあっては、過度に巨大化した都市は「道徳的腐敗」の蔓延するところとみられていた。一国のなかに適度な規模の都市が複数存在することこそ均衡のとれた経済発展を保証する³⁰⁾。しかし『提言』では、フレッチャーによってロンドンに蔓延する

27) *ibid.*, p. 8.

28) Fletcher, *Two Discourses concerning the Affairs of Scotland*, in John Robertson (ed.) *Andrew Fletcher Political Works* (Cambridge, 1997), p. 80.

29) *ibid.*

30) Shigemi Muramatsu, 'Andrew Fletcher's criticism of commercial civilization and his plan for European federal union' in Tatsuya Sakamoto and Hideo Tanaka (eds.) *The Rise of Political Economy in the Scottish Enlightenment* (Routledge, 2003) 参照。

道徳的腐敗をしめすものとしてあげられた「取引所」も「裁判所の仕事」も、多数の人々をひきよせるものとして肯定的に言及されている。『提言』は、フレッチャーの商業文明に対する危惧と大都市の習俗の腐敗論を共有しない。ロンドンの発展と産業の発展を模範としつつ、スコットランドにおいてそのような発展を阻害した要因を明らかにしようとする。

歴史はつねに書き換えられていく。合邦後のスコットランド国民の喪失感に慰めをあたえたスコットランド国民と文化の独自性を主張する歴史から、洗練と産業の発展を跡付ける歴史へと。1745-6年のジャコバイトの反乱と鎮圧を境に過去のスコットランド国民を支えた価値の物語から、未来において実現すべき価値の物語へと変化する。『提言』は習俗の洗練化と産業の発展という新たな価値の展開過程としてスコットランド史を描くのである。

4. 習俗と産業の歴史叙述

『提言』によれば、スコットランドとイングランドの同君連合以前には、「平和の技術」はわずかしら知られていなかった。当時は、その後世界の貿易を増大させることになった国々でさえも取るに足りないものであった。オランダは、この時代よりも少し前にはようやく沼地や湿地の状態から抜け出たばかりで、商業が必要とする安全をもっていなかった。フランスでも貿易は知られていなかった。そこで貿易が足場をえたのはルイ14世の企業的な精神と彼の大臣コルベールの働きによるものであった。イングランドにおいても、貿易を確固とした基礎のうえにおいたのはエリザベス女王であった。スコットランドにおいては、平穏と秩序ある状態からはじめて生じる技芸の改善はみられなかった。統治と法律の不完全さ、貴族の権限と法外な権力、イングランドとの絶え間ない戦争、名門諸家の不和、宗教上の争いなどのために、商業や製造業がほとんど顧みられることはなかった。

当時の「身分ある人々」＝「貴族と豪族」は都市にやってくることはほとんどなかった。彼らの習俗は「都市にひろまっていた平等」を受け入れることはなかった。家臣たちにかこまれた「田舎の生活の孤立した荘厳さ」がそのような「小さな主権者たち」にふさわしいものであった。そのような時代にはエディンバラは首都としての利点を一切もたず、イングランドにあまりに近接していたために安全であるとは考えられず、そのため議会や裁判所の所在地がエディンバラに定められることはなかった。議会は、エディンバラと同じほどパース、スターリング等でもたれた。しかし貿易と製造業が無視され、封建的な習俗がひろまり、政府の所在地が定められていなかった間は、エディンバラはスコットランドの首都としては十分なものであった。

同君連合によってスコットランドの状態は、いっそう嘆かわしいものとなった。自分たちの

国王をイングランドへ送るという名誉をえたにもかかわらず、それは多くの犠牲をともなっていた。スコットランドの状態は征服された地方のそれとかわらなかつた。国民は意気消沈し、わずかばかりの貿易も衰退し、彼らの企画もイングランドによってくじかれた。高貴な人々は、たよるべき宮廷をもたず、田舎で陰鬱に暮らすか、あるいは外国人同士との戦争に「その血を無益にも惜しげもなく流した」。しかし同君連合によるイングランドとの平和が、きわめてゆっくりとしたものであるが、エディンバラの成長を可能にした。イングランドに近いことがその成長の主要な原因となった。この時からエディンバラは議会の所在地となった。しかし議会は夏期に数日しか開かれず、議員たちは家族をエディンバラにつれてこようという気にはならなかつた。また、1660年の王制復古以前の長い期間、狂信 [Fanaticism] の精神と内乱が、国民のあらゆる改善に終止符を打った。王制復古によって統治は外見上は「古来の基礎」のうえにおかれ、内乱は一応おさまったが、しかしこの「国の才能」は、宗教上の厳格さ、権勢をもつ人々による暴政そして枢密院による恣意的な統治によって依然として抑圧されていた。名誉革命によって、自由は確立され、多くのすぐれた法律が制定された。しかし、人々の習俗の改善は、法律によってのみ実現されるものではない。それは、国の「指導的な人々」における「一般的な改革精神」によってはじめて実現されるものである。彼らの改革の精神は「高貴な人々の習俗」を模倣したいと思う国民の感情によって彼らの間にひろまるからである。革命のさいに不運であったのは、この改革精神が現れなかつたことにある。

1707年にスコットランド議会は廃止され、スコットランドとイングランドとの合邦が実現された。合邦は両国民にとって等しく利益ある出来事であり、スコットランド国民にとっては、同君連合体制が抑圧してきた精神と活動力が復活するはずの出来事であった。しかしこの合邦の利点は長い間十分には理解されなかつた。スコットランド国民がもつ独立の歴史への誇りとイングランド人に対する根深い敵意が、彼らがひとつの国民としてあるうえで重要であった方策に対して背を向けさせた。そのため、イングランドでひろまった産業の技術は、スコットランドにおいては緩慢な進歩しかみることではできなかつた。製造業の発展にはほとんど配慮されなかつたし、農業も、借地人の従属的地位、搾出地代、短い借地期間そして僅少なストックのために改善されることはなかつた。合邦以前に営まれていたフランス、オランダ等との外国貿易も、イングランドの高関税のために停止状態にあり、合邦によって開かれた植民地貿易も当初は何の利益ももたらされなかつた。また合邦条約によって、一定の基金がスコットランドの製造業と漁業を促進し奨励するために、1707年より7年間年々使用されるように定められたが、それは適切には運営されなかつた。しかし、このような事態も1720年代なかばから変化をみせはじめる。改良の精神が発揮されはじめ、スコットランド製造業の改良のために多様な

プランが提案された。1727年には、「漁業・製造業信託評議会」が設立され、合邦条約によって定められた基金が活用されはじめた。そしてその評議会は、「非常な熱心さと誠実さ」をもってその職務を遂行したために、その時期以来、スコットランドに導入された改良の主要な源となった。

産業の面で、スコットランドに「最も驚くべき革命」がおこったのは、1746年のジャコバイトの反乱鎮圧以後のことであった。それ以後、これまで緩慢な程度でのみ進歩してきた貿易、農業そして製造業がきわめて急速に発展し始めた。その発展は、諸都市の個々の努力の結果ではなく、国民全体の結合した力の結果であった。また、1746年以降、以前には知られていなかった会社や製造業が設立された。ブリテン亜麻布会社、ニシン漁業会社、ガラス製造業等々である。このような急速な発展の原因のひとつは、立法府がスコットランドの改良にはらった特別の配慮であり、他のひとつは、あらゆる種類の産業が、スコットランドの貴族や財産をもつジェントルマンからえた支援と奨励であった。このふたつの原因のうち、後者は特に重要であった。スコットランドの「貴族と地主ジェントルマン」が最近あらゆる有益な企画において発揮した精神、度量、そして勤勉こそが、すべてを運動させた「偉大な発条」であったからである。彼らは、漁業、製造業そして貿易会社の主要な「冒険者たち」であった。彼らの模範によって活気づけられ、あらゆる身分と職業の人々は同じ精神をもったのである。先の会社を構成するメンバーも主に「貴族と地主ジェントルマン」であった³¹⁾。

この『提言』の記述は18世紀中葉にあらわれたひとつのスコットランド史とみることができ。ただちに気づくことは、「身分ある人々」の習俗との関係で都市(エディンバラ)と産業の発展が記述されていることである。『提言』で使用される「習俗」はきわめて幅広い意味内容をあたえられている。一方では「偏見と狭隘な考え方」、「狂信や宗教上の厳格さ」、「田舎の邸宅での家臣にかこまれた社交のない孤立した生活」、これらは「粗野な習俗」とみられ、それに対して、「偏見や狂信からの解放」、「都市での社交的生活」そして「改革精神」さえも「洗練された習俗」とみられている。そしてその習俗の変化がまず国の「指導的な人々」=「身分ある人々」の間に生じ、その新たな習俗が、彼らに対する国民の尊敬の念と模倣の精神を通して国民の間に広まっていくとみられていることである。そのうえで、この習俗の変化がいかにより産業の発展に作用するかが論じられるのである。それは、合邦後、イングランドから『スペクテイター』誌を通して輸入された「社交」と「洗練」の言説がスコットランドの歴史叙述

31) *Proposals.*, pp.11-23.

に適用され、そこに「土着」したことを意味する。しかし他方で、『提言』の公刊された年の2月、ヒュームの『政治論集』が出版されていた。そしてヒュームの親友のエリオットは、『提言』の執筆者エリオットの子であった。習俗論あるいは洗練論に関して、『スペクテイター』誌、『政治論集』そして『提言』の三者の間にどのような関係があるのか。これは今後検討を要する問題であるが、洗練の問題がひとりヒュームの問題であったわけではないことを示している。『提言』のエディンバラは洗練の都市でなければならなかったのである。

5. 洗練の都市とインダストリ

以上のように、スコットランドの産業は、貴族や地主たちの努力によって1746年以後急速な発展をみた。しかし他方で、エディンバラの状態はきわめてみすぼらしく、スコットランドの改善に対して長く障害であった。首都の改良はその国の改良と必ず何らかの比例を保たなければならない。スコットランドにおける人口のいっそうの増加そして商業のいっそうの発展はエディンバラの改善にかかっている。このような事態にあつて、市参事会や、スコットランド最高法院そして近郊に住む「身分ある人々」は、この問題を深刻にうけとめ、なされるべき改良とそれを実行するための方法について、適切なプランがたてられるべきであるという結論に到達したのである。そして先に述べた委員会が設置され、提言がおこなわれたのであった。それではこのような改良・改善はエディンバラにどのような作用を及ぼすと考えられているのか。

1707年のスコットランド議会の廃止以来、スコットランドの上流の人々は、ロンドンに居を定め、そこを活動の拠点とした。それは、エディンバラはすでに政治的舞台の場を失い、彼らの野心や欲望の対象をあたえることができず、ロンドンのみがその対象をあたえることができたからである。このような事態にあつて、エディンバラを改善し拡張することは、最も重要な課題であると『提言』は言う。首都の改善は国民の一般的な繁栄にたいして最大の影響力をもつからである。もしも、エディンバラが改善され洗練されたならば、ロンドンにおいて生活しているスコットランドの「身分ある人々」は、エディンバラでの生活を選ぶことになるであろう。改良後のエディンバラは彼らに娯楽と野心の対象を提供し、従来それらをロンドンに求めていた彼らをエディンバラに呼び戻すことができる。こうしてエディンバラの人口はその改善とともに増大する。たしかに改良後のエディンバラはかつてのように「身分ある人々」の政治的野心を満足させる舞台を提供することはできない。しかし社会の習俗は変化した、と『提言』は言う。「身分ある人々」の野心と欲望の対象は変化し、社会的名声をえる方法も変化したというのである。以前には、政治的地位をえること、あるいは多くの家臣にかしづかれて大きな

権力をふるうこと、これが彼らの野心の対象であった。しかし商業文明の浸透とともに、いまや社会的名声をえる唯一の方法は、富を獲得することへと変化した。『提言』は言う。「今日、国民というものは、もしも富裕でなかったとしたら、社会的に注目されるにあたいしない」³²⁾。その結果、社会的名声をもとめる「身分ある人々」のエネルギーは、政治的地位や影響力をめぐる党争にではなく、経済的富の獲得へ向けられることになる。富の獲得は貿易と製造業によってはじめて可能であり、また貿易と製造業は豊富な人口をもつ都市においてはじめて有利に営まれる。経済的改革に従事することは彼らの「名誉心」をも満足させるであろう。こうしてエディンバラの都市改革は、彼らに政治的野心をみたす場を提供しえないとしても、富を獲得し、その名誉心をみたす場を提供する。

「身分ある人々」の人口増加とともに、それよりも急速に「あらゆる種類の職業と仕事に従事する人々」の人口は増加する、と『提言』は言う。このような急速な人口増加はふたたびエディンバラを人口過密な雑然とした都市にもどすものではない。すでにエディンバラは拡張されているのであり、さらにイタリアのトリノやドイツのベルリンのように、広々とした通りと大きな建物からつくられている。「ニュータウン」には、「外来者」や「かなりの地位ある人々」がゆったりと生活することになる。「オールドタウン」では、いっそう人口過密になるであろうが。

人口が稠密であることは、そうでない場合に比べて、はるかに大きな消費をひきおこし、その増大した消費が貨幣と商品の迅速な流通をうみインダストリと改良をうむ。そしてエディンバラによって示された模範に国民はやがて従うことになる。こうして有用な人々の数は増加し、地代も増加し、公収入は改善される。怠惰と貧困のかわりにインダストリと富裕が生じる。このような理解を、『提言』はエディンバラの都市改革がもたらす社会的経済的効果について示している。それはひとつの経済学的把握と言っても過言ではない。こうして提言の第一のものがただちに実行に移された。1753年、エディンバラにいくつかの公共の建物を建築するための条例が通過した。9月には、スコットランド銀行と王立スコットランド銀行からの借り入れによって、王立取引所建設の仕事が着手された。1759年にはノース湖の排水がはじめられ、1763年10月、市長ドラモンドはノース湖に架橋するための礎石をおいたのであった³³⁾。

しかし1760年になっても、エディンバラの「不潔さ」については、何ら問題は解決されなかったようである。1761年に『提言』と同じタイトルをもった論考がダルリンプル (David

32) *ibid.*, p.31.

33) Daiches, *ibid.*, p.120.

Dalrymple, Lord Hailes 1726-1792) によって公刊された³⁴⁾。エディンバラにとって必要なものは、公共の建造物などではなく、街を清潔にすることだという。晚餐に招かれた客がトイレを必要とするとき、客は街路へと案内される。このような不潔さこそ解決されるべき緊急の課題であり、「公衆便所」こそ建設されるべきであると、その論考はいう。ダルリンブルは、1752年にヒュームの弁護士図書館館長就任に反対した人物であったが³⁵⁾、市長ドラモンドとともに、「選良協会」の会員であり、それを母体として生まれた「スコットランド技芸・科学・製造業・農業奨励協会」Society for the Encouragement of Arts, Sciences, Manufactures & Agriculture in Scotland (1756-1765)の会員でもあった。「選良協会」の創設者は画家ラムジイ (Allan Ramsay 1713-1784) であり、中心的メンバーはヒュームとスミスであった。このダルリンブルの論考に対して『提言』の側からの反応はみられない。他方スミスは1751年にグラスゴー大学論理学教授に就任する以前にエディンバラで「公開講義」をおこなっていた。スミスが、1762-63年のグラスゴーでの講義で「清潔」の問題をとりあげたとき、エディンバラの「不潔さ」が念頭にあったと考えても突飛な想像ではない。その講義によれば、「清潔」の問題は、「安全保障、および低価格または豊富」の問題とともに「生活行政の第二の一般的部門」を構成する。「清潔」とは、「街路からごみを除去する適当な方法」を、「安全保障」とは、「犯罪防止のための諸規制にかんするかぎりでの司法 [正義] の実施、あるいは都市衛兵隊を維持する方法」を意味する。スミスは、「清潔」と「安全保障」は有用ではあっても、「この種の一般的論述」において考察するにはあまりに「こまかい」ことであり、「低価格または豊富」の問題に進むまえに、「ひとつか二つの考察」で十分であるという³⁶⁾。しかしその考察は、もっぱら「安全保障」に関連して犯罪の問題に限定され、「清潔」の問題は扱われていない。しかしその「安全保障」の問題は、『提言』に示めされた都市論とスミスの都市論との対比を可能とする。スミスは、犯罪の問題を扱うさいに、パリ、ロンドン、エディンバラ、グラスゴーの各都市を比較する。犯罪の頻度からすれば、パリよりもロンドンがはるかに低く、エディンバラよりもグラスゴーが低い。それは「他人に依存して生きる人々」の多寡による。言い換えれば、貴族層によって雇用される召使の多寡による。このようなスミスの理解は、『国富論』においては、資本によって雇用される生産的労働と収入によって雇用される不生産的労働の区

34) [David Dalrymple], *Proposals for carrying on certain Public Works in the City of Edinburgh* (Edinburgh, 1761).

35) *Oxford Dictionary of National Biography of Oxford*, Vol. 14, p. 979.

36) R. L. Meek, D. D. Raphael and P. G. Stein (eds.), *Adam Smith, Lecture on Jurisprudence* (Oxford, 1978), pp 331-333 (水田洋訳『法学講義』(岩波書店, 2005年) 261-264頁)

別によって深められ、次のようなエディンバラとグラスゴーの比較となる。

収入の消費によって維持されている大半の人の怠惰が、資本の使用によって維持されるべき人びとの勤勉を腐敗させることは、ありうる・・・合邦以前のエディンバラには、商業や工業はほとんどなかった。スコットランド議会在もはやそこで開かれなくなり、そこがスコットランドの主要な貴族や郷土にとって必要な居住地でなくなったとき、同地はいくらかの商工業をもつ都市となった。しかしながら、そこはいまなおスコットランドの主要な裁判所、関税局、消費税局などの所在地である。したがって、かなりの収入がいまもひきつづきそこで消費される。それは商工業では、住民が主として資本によって維持されているグラスゴーにはるかに劣っている。大きな村の住民が、製造業でかなりの進歩をとげたのちに、その近隣に大貴族が居をかまえた結果、怠惰で貧乏になったことは、ときどきみられることである。³⁷⁾

イングストリの発展のためにロンドンから貴族を呼び戻そうとする『提言』のプランをスミスは批判しているかのようにみえる。たしかにこの点を証明することはむずかしい。しかし明らかに、その『提言』によって構想されたエディンバラは、スミス経済理論から導きだされるイングストリの都市とは異質である。スミスにとって、人口が収入によって維持されるか、あるいは資本によって維持されるかが重要であった。収入によって維持される不生産的労働者は怠惰をひろめる。それゆえ、「身分ある人々」がエディンバラに居住しないことはイングストリの発展にとって好都合でさえある。他方、『提言』は増大した人口が資本によって維持されるか、あるいは収入によって維持されるか、それを一切問題としない。『提言』が資本によって維持される人々に関連する施設と収入によって維持される人々に関連する施設を無造作に並列する理由はそこにある。スミスとは相違して、『提言』はあくまで「身分ある人々」に期待をよせる。低俗な快樂におぼれることのない身分と財産ある人々は、何らかの仕事を見いださなければならぬ。戦争と政治的党争という大きな目標がもはや存在しないとしたら、彼らは「平和の一般的技術」を改良し発展させることにそのエネルギーをむける。エリザベス女王の治世にはイングランドは、現在のスコットランドのように、形成過程にある国家であった。まさにそのときイングランド人の精神が発揮されはじめた。「ジェントルマンたち」が、私人と

37) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Modern Library, 1937, p.320. (水田洋監訳 杉山忠平訳 『国富論 2』(岩波書店) 119-120 頁)

して、船舶の供給と軍艦の装備そして公共の建物の建築に貢献したのである。程度は劣るとはいえ、同じ精神がスコットランドにも現れつつある。河川に架橋すること、ハイロードを補修すること、製造業を設立すること、商業会社を設立すること、これらはスコットランドの第一級の名声をもつ人々によってすでに成し遂げられた仕事である。確立された商業のこまごまとしたことは商人たちの注意をしめるかもしれないし、彼らにまかせておけばよい。国民の指導的な人々がその力と影響力を行使すべきであるのは、より大きな目標の遂行にある。エディンバラを拡張し、美化し、そして改善することほど大きく、かつ彼らに名誉をあたえる目標はない。

おわりに

合邦の結果、「豊富な財産をもつすべてのわが国民」、「公の仕事を欲する人々」、「貴族やジェントリのうち最も富裕な人々」、要するに身分と財産をもつスコットランド人はロンドンへその拠点を移すであろうというフレッチャーの予言³⁸⁾は的中した。そしてその事実が、『提言』もスミスも認めるところであった。しかしその事実の受け止め方は相違する。スミスにとってインダストリの発展のためにむしろ好都合であったのにたいして、『提言』はエディンバラの都市改造によって身分ある人々を呼び戻し、彼らの消費需要と社会的事業への献身によってインダストリの発展をはかることを意図した。他方、『提言』の立場はフレッチャーのそれとも相違する。それは大都市の習俗の腐敗に対するフレッチャーの危惧を共有しない。『提言』は言う。大胆にエディンバラを最大限にまで拡張せよ。そこは政府の所在地ではないので、奢侈と悪徳の中心にはけっしてなりえないと³⁹⁾。かって「身分ある人々」がその名誉をきそった政治の世界は、「奢侈と悪徳」の世界である。フレッチャーはその「悪徳」の世界を「シヴィックな美德」によって再構築しようとしたのにたいして、『提言』はその悪徳の世界が失われたことを喜ぶ。商業文明のもたらした習俗の変化が、「身分ある人々」に「悪徳」の世界にかわる世界を、洗練された都市生活と経済改良の世界をあたえた。

『提言』に示された歴史理解は、名誉革命以後の時期に「専制と世界の奴隷化」の危機と戦った、フレッチャー、トランド (John Toland 1670-1722) を中心とするコモンウエルスマンたちの歴史的意義を曖昧なものとする。彼らは、名誉革命によって自由が確立されたという

38) Fletcher, *An Account of Conversation*, p.190.

39) *Proposals.*, p.33.

『提言』の立場とはことなつて、名誉革命以後、「専制の危機」が近づきつつあることを認識しその危機と闘った人々であった。彼らの立場からすれば、名誉革命は自由を確立するものではなかつた。彼らは、封建的な土地所有関係の解体以後に形成される常備軍こそ専制政治をうみだすものとして、1697年からはじまる常備軍論争⁴⁰⁾において常備軍反対派の中心的な人々であった。また彼らは、聖書の恣意的な解釈によって国王の権限の増大をはかる「祭司の術策」、地位と年金によって議員を買収し議会を形骸化しようとする「宮廷の術策」を批判し、王権の制限＝議会の権限の強化と1年議會を主張した人々であった⁴¹⁾。そして彼らこそ、ブリテン初期啓蒙のなかで急進的な潮流を形成する人々であった⁴²⁾。『提言』の歴史観は封建的遺物対近代[商業]という図式のうえに立っている。封建的な残存物が克服されればそれは商業の発展と習俗の変化とともに克服されつつある、そしてそれに「身分ある人々」の貢献が伴えば、産業は発展する。この歴史理解は、危機をはらむ近代への視角を欠き、コモンウエルスマンたちの歴史的意味を抹消してしまう。

合邦後のスコットランドでは、アディソンの『スペクテイター』誌が広く読まれた。スコットランドの人々は、そこから「迷信」や「狂信」から解放された、「洗練」された社交的生活を学んだだけではない。彼らは名誉革命体制と商業文明の肯定的理解を同時に吸収したのである。アディソンにおいては、名誉革命によって確立されたイングランドの「統治形態は、もっとも理にかなったものであり、人間本性のなかにみいだされる平等性にもっとも合致したものであった。自由は立法権力が「三つの団体」におかれたとき最もよく保持される。ポリビウスとキケロは、王政的部分、貴族政的部分、民衆政的部分からなる古代共和政ローマの「混合統治」をすぐれたものと考えたが、それが最もよくあてはまるのはイングランドの国制である。自由の「自然的果実」は「富と豊富」であり、「富と豊富」のあるところには必ず学問と自由技芸が栄える⁴³⁾。また、アディソンは、ウィリアム・ペティの理論を使って、フランス・ルイ14世の領土の征服をめざす「陸上帝国」を批判する。「ペティが言うように」、アイルラン

40) 常備軍論争については、村松茂美「フレッチャーとデフォー 「常備軍論争」を中心に」小柳公洋・岡村東洋光編『イギリス経済思想史』(ナカニシヤ出版、2004年)参照。

41) John Toland, *The art of governing by partys* (London, 1701), p. 70, Andrew Fletcher, *Speeches by a MEMBER OF THE PARLIAMENT Which Began at Edinburgh the 6th of May, 1703*, in Robertson (ed.) *Andrew Fletcher Political Works* (Cambridge, 1997), p. 138.

42) 初期啓蒙における急進的潮流については、Margaret C. Jacob, *The Radical Enlightenment: Pantheists, Freemasons and Republicans*, Second Revised Edition (A Cornerstone Book, 2006), Jonathan I. Israel, *Radical Enlightenment: Philosophy and the Making of Modernity 1650-1750* (Oxford, 2001) 参照。

43) *Spectator*, no.287, in *The Spectator*; complete in one volume (London, 1830), p. 410.

ドからのイングランドへの人口移転が、後者の人口を稠密化し、地代と国家収入を増大させるとすれば、ルイ 14 世の領土の獲得は、人口の減少を伴い、地代と国家収入を減少させ、フランスをいっそう貧しくするだろうと⁴⁴⁾。『提言』もその都市改革計画を正当化するためにペティの議論を利用する。『提言』は言う。「ペティの議論を信じているならば」、「革命の時期あたりには」、ダブリンの人口は現在のエディンバラの人口をこえていなかった。しかしここで提案されたものと類似した方策に従うことによって、ダブリンはいまや信じられないほど拡張され、人口は 3 倍近く増大した。製造業と商業においてアイルランドがどれほどの進歩をとげたかはよく知られている。彼らの貴族たちがロンドンへ行くのはいっそうまれであり、ダブリンに居住することのほうがいっそう多い。彼らの娯楽は最良の規制のもとにあり、彼らの劇場はロンドンのそれに匹敵さえる。「報奨金の授与」というかたちで製造業を奨励した「ダブリン協会」(DUBLIN society) のやり方はアイルランドの各地で模倣されている⁴⁵⁾。

ペティは富の増進の起点を人口の増加においた。合邦後のスコットランドで、人口の流出 = 減少に悩む『提言』はペティの理論に頼った。『提言』はその人口流出 = 減少の原因を「身分ある人々」がロンドンへ流出したことに求め、都市の改造によって彼らをエディンバラに呼び戻そうとした。しかしペティは、その富の増進論にもとづいて、アイルランドからイングランドへの人口の強制的移転と「アイルランドの海没」を「一夜の夢」として語っていた⁴⁶⁾。フレッチャーは、ペティのその議論を逆手にとって、商業文明のもとでは、大都市ロンドンへの富と人口の集中が必然的に生じ、道徳的腐敗が蔓延すると論じた。すでに述べたように、『提言』には、このような商業文明に対する批判的視点はまったく存在しない。他方、スミスが商業社会の経済分析をはじめたとき、その世界は、「身分ある人々」の貢献に期待をよせる世界とは全く異なって、「庶民」の「労働の世界」であった。スミスにあっては、1707 年の合邦に

44) *Spectator*, no.200, in *ibid.* p.288. フレッチャーとペティの「アイルランド海没論」については、Shigemi Muramatsu, 'Andrew Fletcher's criticism of commercial civilization and his plan for European federal union', in Tatsuya Sakamoto and Hideo Tanaka (eds.) *ibid.*, 「陸上帝国」と「海洋帝国」の差異については、村松茂美「フレッチャーにおける「国民的政治共同体」と国際世界「ダウナント的慎慮」から「新たな市民的美徳」へ」佐々木武・田中秀夫編著『啓蒙と社会 文明観の変容』(京都大学学術出版会, 2011 年) 参照。

45) *Proposals.*, pp.33-4.ここで「ダブリン協会」とは、1731 年に創設された「ダブリン農業・製造業・他の有用な諸技芸 [・諸科学] 改良協会」Dublin Society for improving Husbandry, Manufactures and other Useful Arts [and Sciences] を意味する。この協会は 1820 年に「王立ダブリン協会」Royal Dublin Society となった。

46) William Petty, *Political Arithmetic* (1690), in C. H. Hull (ed.), *Economic Writing of Sir W. Petty*, 3 vols, Cambridge, 1899, vol.1, pp.285-6. (大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』岩波文庫, 1955 年, 97 頁)

よって、「庶民」はすでに貴族の抑圧から解放されていた⁴⁷⁾。そして彼らは「勤勉と節約」によって富＝資本を蓄積する。この資本量増大の程度によって究極的には人口の増減が決定される。人口の増加は富の増進の起点ではなく、資本量の増大の結果である。この世界では、人為が「富裕の自然的進歩」に介入することがなければ、富と人口がひとつの都市に集中することもない。「すべての文明社会の大規模な商業とは、町の住民と農村の住民とのあいだで行われる商業である」⁴⁸⁾からである。こうしてフレッチャーの描く商業文明社会とも、『提言』の描く世界ともまったく相違する世界が成立するのである。

47) スミスは次のように言う。「イングランドとの合邦によって、スコットランドの中流と下級の身分の人々は、それ以前つねに彼らを抑圧していた貴族制度の権力から完全に解放された。」Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, p.897. (水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論 4』(岩波文庫, 2001年), 354頁)

48) *ibid.*, p.356. (水田監訳・杉山訳『国富論 2』(岩波文庫, 2000年), 183頁)

Summary

From “Union” to “Enlightenment”:
A City of Politeness and Industry

In the controversy before the Union of 1707 Andrew Fletcher of Saltoun claimed on the basis of the economic theory of William Petty that the incorporating union of Scotland and England and the free trade would cause the concentration of wealth and population into London, and that the concentration would corrupt morals. And he foresaw the outflow of persons of rank in Scotland to London after the Union. His prediction came to pass. Nobility and laird left in Scotland lost their opportunities to take a part in politics because Scotland's parliament was abolished. They turned their energies from politics to improvement of agriculture by establishing 'Honourable Society of improvers in the Knowledge of Agriculture' in 1723. But they came to understand the necessity of the growth of population to encourage industry and improvement. The economic theory of William Petty taught them the necessity, for, according to his theory, wealth depended on the growth. In 1751 the town council of Edinburgh planned for refining and enlarging the city in order for persons of rank left for London to live again in Edinburgh. Refinement of Edinburgh would cause the growth of the number of persons of rank. Their polite manners would pervade the city and their spirit of reform would stimulate industry and improvement. This was the purpose of the town council's plan. What reception did Petty's theory find from the age of the Union to that of the town council's plan? Main purpose of this paper is to trace the process.